

阪神間モダニズムの開花



しろやま 城山橋で撮影された家族写真（昭和初期撮影。カラー化）

精道村を含む阪神間では、明治後期から昭和初期にかけて「阪神間モダニズム」と呼ばれる独自の地域文化が開花し、近代的でハイカラな生活様式や芸術、建築等が育まれました。精道村には画家のこいでならしげ小出橋重やよしはらじろう吉原治良、写真家のかんべえナヤ勘兵衛やなかやまいわた中山岩太、音楽家のましこういち貴志康一、作家のたにざきじゅんいちろう谷崎潤一郎、詩人のとみたさいか富田碎花といった多くの芸術家や文化人が移り住みました。

阪神間モダニズムは、現在の芦屋市の文化やライフスタイル、イメージ等にも大きな影響を与えています。

精道村の名建築

現存する精道村の頃に建てられた近代建築は、戦前に花開いた阪神間モダニズムを今に伝える大切な歴史文化遺産です。それらのいくつかは、国の文化財として指定もしくは登録され、大切に保存・活用されています。

国指定重要文化財

旧山邑家住宅（ヨドコウ迎賓館）

原設計者 フランク・ロイド・ライト
 実施設計者 えんどう あらた みなみ まこと 遠藤新・南信
 （遠藤新建築創造所）
 構造 鉄筋コンクリート造4階建
 所在地 山手町3-10
 竣工年 大正13年（1924）
 指定年月日 昭和49年（1974）5月21日



（出典：『建築写真類聚』第5期第13〔文化住宅巻4〕大正15年〔1926〕刊行）

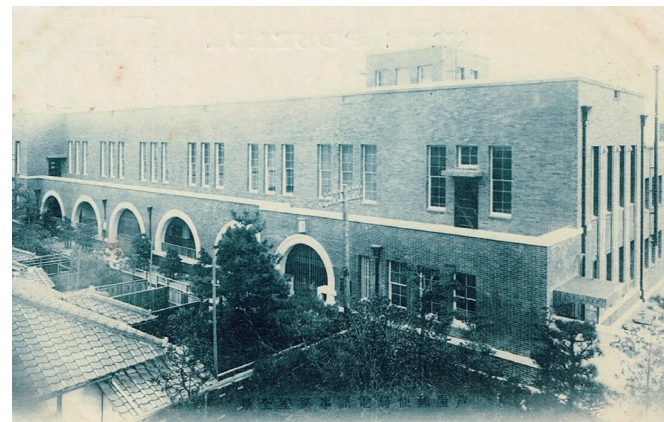


（出典：『松濤秀萃』昭和10年〔1935〕刊行）

国登録有形文化財

旧松山家住宅松濤館（芦屋市立図書館打出分室）

設計者 不明
 構造 鉄筋コンクリート・石造2階建
 所在地 打出小槌町15-9
 竣工年 不明
 移築年 昭和5年（1930）
 登録年月日 平成21年（2009）1月8日



（絵葉書：昭和初期発行）

国登録有形文化財

旧芦屋郵便局電話事務室（芦屋モノリス）

設計者 うえなみ あきら ていしん 上浪朗（通信省）
 構造 鉄筋コンクリート造2階建
 所在地 大榎町5-23
 竣工年 昭和4年（1929）
 登録年月日 平成29年（2017）6月28日



（出典：〔芦屋市1990a〕）

国登録有形文化財 芦屋仏教会館

設計者 かたおか やすし 片岡安
 構造 鉄筋コンクリート造地上3階・地下1階建
 所在地 前田町1-5
 竣工年 昭和2年（1927）
 登録年月日 平成30年（2018）3月27日

コラム

とみたさいかきゅうきょ

富田碎花旧居 — 谷崎潤一郎・富田碎花が暮らした建物

富田碎花旧居は、大正～昭和に活躍した2人の文化人が暮らした場所です。

1人目の文豪・谷崎潤一郎（1886—1965）は、昭和9年（1934）3月から昭和11年（1936）11月までの2年半の間、3番目の妻となるまつこ松子とその子ども・えみこ恵美子とともに隠れ住んでいました。谷崎は大正12年（1923）の関東大震災を契機に関西へ移り住み、阪神間では21年間で13回もの引っ越しを繰り返しました。その中で富田碎花旧居は「打出の家」と呼ばれており、現在の展示棟を書斎として使用したそうです。谷崎はここで『源氏物語』の現代語訳や『猫と庄造と二人のをんな』を執筆しました。また、昭和10年（1935）には、ここで松子との結婚式を挙げました。

2人目は大正・昭和の詩壇に大きな足跡を残した詩人・富田碎花（1890—1984）です。明治23

年（1890）に盛岡市で生まれた碎花（本名：かいじろう戒治郎）は、大正2年（1913）、23歳の時に肺を患い療養のために精道村へやってきました。そして、大正10年（1921）からは精道村に定住し、昭和14年（1939）から昭和59年（1984）に93歳で亡くなるまで現在の富田碎花旧居で暮らしました。碎花は、『兵庫讃歌』などの兵庫県での多くの実績から「兵庫県文化の父」と呼ばれています。



所在地 宮川町4-12
 開館日時 水・日曜日 午前10時～午後4時
 （入館は午後3時まで）

※8月13日～19日、12月29日～1月3日をのぞく